［二〇二二年度大会シンポジウム］特集　人と動物のかかわりの思想史

コメント：断絶点としての「近代」――「人」とは誰か――

長志珠絵

シンポジウム「人と動物のかかわり」について、準備報告を伺う以前、前年の大会シンポジウムとの連続性もしくは延長をあれこれ予見した。近代学知があとづけた「人」と「動物」の分岐線／境界をひく営為はメタ認知に関わる論点を多く提起してきたからだ。人種言説は典型的な領域であり、明治二十年代の地理の教科書に「莫古人種（モンゴル）」の日本人男性が「高加索人種（コーカサス）」のヨーロッパ人男性と並置されて登場する（竹沢泰子他編『人種主義と反人種主義――越境と転換』京都大学学術出版会、二〇二二年）。板東報告の用語を使えば、「自己植民地化」がねじれた形で現れる動きとして顕著だろう。あるいは井上太一（『動物倫理の最前線』人文書院、二〇二二年）による批判的な動物倫理学の文脈では、犬肉食批判において露骨に現れる露骨な人種・民族差別の表出と表裏一体としてのナショナリズムなどが指摘されてきた。それらはいわば、構造化された近代知とその延長の、「西洋」に対する劣位の文化を可視化するものだ。しかし本シンポジウムの仕掛けは、報告の時代を逆順にすることで断絶点としての「近代」を位置付け、さらにそこにとどまらない、研究史の組み替え、読み替える刺激的な論点が提起されたように思う。

三報告が選んだ「動物」は設定そのものが各時代の倫理思想史的方法論を含み込む。人との関わりにおいて、それぞれの動物がどのような境界線に位置するのかをめ

ぐって、極めて思想史的な主題を提起してみせた。

真辺報告が焦点をあてた近代は、室生犀星・谷崎潤一郎といった文豪が構築主義的に身近な家族（パートナー）とする「猫」である。語られる「動物」枠組みは「近代」的に限定されるが、とはいえいまだ愛玩動物としての地位は確立していない様が浮かび上がる。板東報告が近世国儒論争において見出すのは、賀茂真淵による、群れをなして江戸の都市部をほっつきあるく人から自律した犬、あるいは馬琴が描く、物語のヒロインに欲情する犬であり、「ペット」像からはほど遠い。犬と猫、という近代家族言説の枠内にある身近な動物たちと「人」との距離や認識のあり方の違いが明確に輪郭をあらわす。特に伊藤報告が扱う『日本霊異記』が描く物語の構造と世界にあって取りあげられる動物は、まさに人と関わる里山の、人の生活空間に共存する小動物である。畏怖の対象であったり、倫理規範の鏡であったりするとともに、人との位置関係において入れ替わる可能性をすらはらんでいる。逆に伊藤報告の視座からシンポジウムのタイトルは「動物と人のかかわり」に組み直されるだろう。三報告によって近代学知がしらず、織り込んできた科学的言説をまとった「人」と「動物」という区分、序列を伴う二項対立の可変性は鮮やかに印象付けられた。

それぞれの議論について鑑みると、真辺報告の前提である『猫が歩いた近現代』（吉川弘文館、二〇二一年）は、歴史的文脈の中での「猫」の位置や猫観の可変性を明らかにした試みであり、社会史と感情史を架橋する試みとしても興味深い。報告では室生犀星と谷崎潤一郎という近代文豪の猫愛を扱うことで、大衆化や近代文学が自立する時期での道徳という評価軸からの文学の解放を通じ、猫像や猫愛の現代化をとらえた。猫を通して近代を扱う真辺報告が、動物愛護や「日本人」にとって歴史貫通的な猫愛という思い込みを揺るがすとすれば、板東報告の、代表的知識人の言説を犬に焦点化した着眼は、儒学・国学思想史言説を異類婚物語の配置によって近世言説空間のなかに照射してみせた。近世国儒論争を扱う板東報告は、人と獣を弁別する規範と儒者の「自己植民地主義」としての夷狄観の焦点として「犬」を設定する。この方法は、真淵の犬論にラディカルさを読む。さらに、「生類哀れみの令」以後、江戸の都市空間における野犬コミュニティとしての〈犬〉の歴史性をとらえ、馬琴の『南総里見八犬伝』が性規範ウオッシュとして読み替えられていた物語構図を見出す。異類婚――性規範を逸脱するタブーを犯す猫は化け猫だったり、狸だったり――を考察の遡上にのせることで、犬が、しかしあくまで伏姫と

いう人間との関係性において道徳的に昇華され、プラトニックな親密圏形成とされた物語の特徴を際立たせる。人と動物の違いをめぐる近世思想史の代表的な論争が焦点化したのはまさに性規範への問いであった。異類婚物語の新たな解釈として広がりを持つ論点だろう。

同じく異類婚を焦点とした物語の解釈でありながら、伊藤報告による『日本霊異記』の世界は、人と狐や牛を里山の隣人として捉える。それは、生業を支える存在であったり、人びとの生・生活に直結した存在として人びとの身近にあるとともに「逆転」「違わない」という点で人を脅かす存在でもある。

三報告は実は時間軸としても互いに接続しない、「人と動物」をめぐる議論の類型化を敢えて外すところにまずは立脚点がある。大会委員長によるニューズレターの趣旨文では、ペットとしての動物への偏愛を、時代性を帯びた思想的特徴とみるという。思想史的な課題を見出そうとする試みは達成されたというべきだろう。

このようにまとめてみると今回の試みでは内在的に、ジェンダーとセクシュアリティといった方法的視座を通じ、ボーダー・主体のあり方といった問題系が論点として浮上し、新たな物語解釈や関係性をときほぐすツールであることに改めて気付かされた。真辺報告に扱われた二人の男性文学者の猫との関係性は、女性や子どもを媒介にすることで成り立つのではないだろうか。とするならば、渡辺浩が『明治革命・性・文明』（東京大学出版会、二〇二一年）で描く、「理想の男性像」の揺れと分裂といった主体の置かれた位置が猫との〈男性・ヒト〉との関係においてさらに見えてくるのではないか。そしてそれは家父長的なあり方ではあっても単なる男性性ではなく、日本の近代に通底するジェンダー化された「自己植民地主義」を含むものだろう。谷崎の場合、家人を介さない対象が「洋猫」であったことには何らかの歴史性を見出してもよいのではないか。こうした浮上するジェンダー要素は、男性作家の主体性を支えるアイデンティティに関わって、交差性への問いも浮上する。

その際、あらためて動物と人との関わりといったときの「人」とは誰かといった論点は重要だ。もちろん伊藤報告が丁寧に描き出したように、「人」をめぐる問題系が、性差に限定されて組み替えが想定されるわけでは当然に、ない。一方で、ジェンター射程が人々の属性としての性別を問題化する方法論であるとするならば、セクシュアリティは個々のアイデンティティに関わる認識のありようであり、両者は社会的意味づけを異にする。この点で、板東報告が光を当てた馬琴作品の伏姫に「欲情

する八房」といった生生しさ、そしてこれらの記述が明治近代では削除されていく点を敷衍して考える際、批判的動物倫理学の試みが、急速に学術的厚みを増してきたことの方法論的な提起と論点を共有するように思われる。特に欧米圏の近現代の文脈では 動物搾取の伝統への反対論として蓄積された動物倫理の議論は、動物たちと人間の関わりを考え直すことでもあり、同時に「人」と「人以外」への問いを広げることで、性の規範性を批判的に分析してきたクイア理論と重なりあうという。性欲は動物性と結び付けられることが多いが、例えば、芸娼妓解放令（一八七二年）としての「牛馬解放令」の言説が明示したメタファーとしての動物は、劣位であることに加え、「動物」の側に位置づけられた「娼妓」は、コントロールできない欲望に突き動かされる存在としてステイグマ化もされる。

大会報告に対する会場からの質問としては、比較の視座としての「文化圏」の設定、犬猫観の世界同時代性など議論は盛り上がった。ないものねだりとしては、洋猫を描く女性作家の、さらに帝国日本圏内の植民地出身作家の日本語文学などに「動物」と「人」に関わる論点が登場する可能性はあるのだろうか。

真辺報告の、一九世紀での猫の登場を絵画と文学の交差から読み解く議論は説得的だった。では報告で扱われた谷崎の猫論について、同時期の竹久夢二や藤田嗣治と交差するのか否か。クイア理論のいう、シスヘテロ女性をシスヘテロ男性に対比させて堕落や無秩序の象徴とみなすモデル設定はなされるのか、など興味はつきない。

三報告に選ばれた「動物」の位置する境界線をどのように設定するのか、研究史の蓄積をふまえ広がりのある議論が可能だろう。

（神戸大学教授）